

---

# **(仮) 殺人ピエロが幻想入り**

@home

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

（仮）殺人ピエロが幻想入り

### 【Nコード】

N2264BA

### 【作者名】

@home

### 【あらすじ】

平和な幻想郷に忍び寄る魔の手！

果たしてその目的とは！？

不快な表現や残酷な描写が多々あります。苦手な方は戻ってください。

## 1・開幕

今宵は満月。時は丑三つ時。

幻想郷には『魔法の森』と呼ばれる場所がある。

漂う瘴気が強すぎる為、人は滅多に訪れぬ森。

しかしながら薬品や薬の材料となる貴重な植物なども生息し、それを狙う人間が入り込む事も屡々。

尤もその半数以上は幻覚などによって惑わされ野垂れ死ぬか、凶暴な獣や妖怪の餌になる。

『魔法の森』は人里の様に安全な場所ではない。

人里の外では、妖怪は人を殺す事もなぶる事も赦される治外法権なのである。

故に 夜雀の妖怪『ミステリア・ローレライ』は驚いていた。

いつものように夜空を遊覧飛行中、夜目が効く彼女は眼下に入らしきモノを発見した。

どうせ人型の獣人か何かだろう、と思ったがなんだか今日に限って凄く気になる。

なので少し高度を落として接近してみる事にした。

近づいて見ると服を着ている。

服を着ている知性を持った妖怪も珍しくはないが、その場合大抵力の強い妖怪だ。

長きに渡りこの森に住んでいる自分が知らないはずはない。

臍氣に後ろ姿しか見えないが、ミステリアはこれは迷い込んだ人間だ、と結論付けた。

一瞬脳裏に、何故この時間にこんな場所に人間がいるのか、と疑問が浮かんだがそれも直ぐに消えた。

彼女にとって今は目の前の人間でどう遊ぶかの方が重要な事なのだ。

「」

鼻唄混じりに能力を発動する。

ミステリアの能力は人を鳥目にする事が出来る。

能力の範囲に入った人間は昼夜問わず一瞬で目の前が真っ暗になる。過去に彼女が鳥目にしてきた人間は、突然の事に慌てふためき転んだり叫んだりした。

中には崖から転げ落ちたり恐怖で失禁する者もいた。

さて、目の前の人間はどのような反応を見せてくれるのか。

「……あれ？」

時にして十秒程経っただろうか人間に変化はなかった。

強いて言うなら能力を使った瞬間歩みを止めたぐらいだ。

うめき声一つもあげない。

もともと夜なので暗かったとはいえ、月明かりで数メートル先まで見えたはず、それが急に見えなくなったのに動じないとは…。

ミステリアは不思議に思う。

まさかこの人間立ったまま寝てるんじゃないか、とつい考える程全く動かなくなった。

しかし、このまま見えていても仕方ないのでミステリアは次の行動をおこす事にした。

（腕の一本でも食べれば動くかな？）

知性のある妖怪でも人間を食べる。

これは極当たり前の事である。

人間にとって家畜が一つの食材であると同様に、妖怪にとって人間も一つの食材であるのだ。

どちらかと言えば妖怪は、人間から言う家畜を食べるより人間を食べる方が自然なのである。

久しく人間を食べていなかったし、まあ里の近くじゃないからい

いだろう。

そう思い、ミスティアは人間に近付いていった。

徐々に迫る男との距離。

ミスティアは丁度男の背後から接近する形で近付いていった。  
浮いているので足音は当然ない。

近づいから分かったが、これは里にいる人間とは違うようだ。  
神隠しにあつた外来人かも知れない。

頭まで仮装しているのか妙にモコモコした服を着ている。  
おまけにかなり小肥りのようだ。

「…え？」

突如ミスティアの視界が歪んだ。

次の瞬間襲ってくるのは鋭い痛みと熱。

「痛ッ！！？」

右目だ。

右目に何か異物感がある。

それと同時に咄嗟にその場を離れた。感じた事のない痛みに葛藤しながら右目に手を添える。

何か刺さっているのが分かった。

（あの人間に攻撃された？でも何も見えなかった。どうやって？）

ミスティアは痛みに耐えながらも右目に深々と刺さっているモノを抜いた。

「…うぐっ……ナイフ…？」

最早空洞となった右の眼窩からは途絶える事なく血が滴り落ちていく。

残った左目で刺さっていたモノを見ると刃渡り10cm程度のナイフであった。

いくら妖怪だからといっても、もうこの目は再生しないだろう。

取り敢えず今は此处を離れるのが先決だと考えたミスティアは飛び立とうとした。

が、その瞬間景色が反転した。

（あれ？）

自分が転んだ事に気付きすぐ立ち上がろうとするが、立ち上がれない。

（なんで？）

手を地面につき、立ち上がろうとしても立ち上がれなかった。

人は極度の緊張状態や恐慌、或いは興奮状態に陥った時、回りの音が聞き取りにくくなったり痛みに鈍くなったりする。

所謂、アドレナリンという物質が脳から過剰に分泌されるからである。

思考する妖怪も同様である。

故に、ミスティアは先程から自分の足がない事に気付かなかった。

「…うそ…うそでしょ？」

信じられない現実。

本来ソコにあるはずの自分の足がない。

たとえ立ち上がろうとしても、立ち上がる足が無ければ意味がない。

既に、ミスティアの周りは血の池を作っていた。

生きている限り血液は循環する。

だが、循環先がなくなつた両足首からは血が噴水の如く吹いていた。流れた血は地面に染み込み、その大地を紅く染めていく。ミステリアが必死に押さえても留まることなく流れ出る血液は徐々に体力を奪っていく。

（…ああ……わたし……ここで死ぬんだ……）  
理解してしまつた。

訳の分からぬまま、自分はここで死ぬと。  
もう痛みはなかつた。

血を流しすぎたせい意識は朦朧とし、変わりに眠気と寒さがあつた。

ダルい。

眠い。

寝てしまいたい。

しかし、

「……ま……だ……死にたくな……い……」

残る力を全て出しミステリアの発した最後の言葉は、夜の森へと消えていった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2264ba/>

---

（仮）殺人ピエロが幻想入り

2012年1月5日19時47分発行